

P-3 救急と高気圧酸素治療

廣澤壽¹⁾ 石部裕²⁾

}	¹⁾ 鳥取大学医学部附属病院 高次集中治療部
	²⁾ 同麻酔・集中治療医学

鳥取大学医学部附属病院は、東西に長く広がる山陰のほぼ中央に位置し、大山・隠岐国立公園に指定された風光明媚な地域にある。当院における高気圧酸素治療（OHP）室の年間症例数は約30例、施行回数は約300回前後であり、数としては少ない。緊急OHP症例としては、急性CO中毒、ガス壊疽、減圧症、空気塞栓症等で、全症例数の約1割である。急性CO中毒に対するOHPの有効性に関しては明確なEBMがなく、議論されている昨今であるが、我々の施設では原則的に施行している。漁業潜水、潜水土木作業、ダイビング愛好者の増加によって、減圧症の増加も危惧されているが、幸いにも重症患者を収容する事態には至っていない。今回は、緊急OHP依頼に対する我々の対応、施行に際しての安全性確保の問題、今後の課題について検討してみたい。

P-4 救急医療の中での高気圧酸素治療の役割

井原勝彦 白根 誠 五阿弥勝穰 花岡寛治
入船竜史 野間興二 宮田正彦 石川勝憲

(国立病院呉医療センター)

【目的】昭和49年、スモンの慢性期治療目的で開設された国立病院呉医療センターの高気圧酸素治療室は、その後地域の要請に応じて、減圧症、一酸化炭素中毒等の救急医療にも対応して参りました。現在では、ここ数年間、高気圧酸素治療は、年間述べ約5000人、約1000回の使用となっております。

【方法】当院高気圧酸素治療室開設以来の治療患者数は平成4年の年間のべ5980例をピークに減少しつつあります。しかしながら、それに代わり、最近5年間は、救急取扱いの、急性期治療の症例が増加しつつあります。今回、当院の急性期治療を紹介、分析し、高気圧酸素治療の対象疾患がどのように変化しているかを検討します。

【結果】高気圧酸素治療への期待は、明らかに、慢性期の治療から、急性期の治療へと大きく変化しており、なんでもかんでも、高気圧酸素治療の対象としていた昭和50年代とは異なり、一酸化炭素中毒や減圧症などの、ごく限られた疾患の、急性期の治療にその重心が移動して来ています。取り分け、瀬戸内海の島嶼部を診療圏とする当院では、湾岸工事、橋梁工事、ダイビングスクールなどのダイバーの活動が頻繁であり、救急医療としての高気圧酸素治療の需要が増加して来ております。

【結論】今日、救急医療分野では、ヘリコプター搬送等、患者搬送手段の向上から、敏速な遠距離搬送も可能となって参りました。したがって、適応の明確な症例は、搬送距離のハンディキャップを超えて、より良き治療が求められる時代であり、今後の高気圧酸素治療の救急体制づくりが重要であると考えられます。